

ま え が き

来るべき高齢社会を迎えるにあたって、従来の通勤・通学交通の対策を中心とした交通計画から高齢者全般を視野に入れたより総合的な交通計画策定に発展させていくことが交通計画にたずさわる者にとって重要な任務である。本報告書はその一つの方向を示したものであり、以下にその構成を示す。

第1章では、警察庁、広島県警等の交通統計データを用いて、高齢者の交通事故の実態を分析した。それによって高齢社会における交通安全の課題を整理し、高齢者ドライバーの増加に伴う交通事故の増大を押さえることが、今後の交通計画で最大の課題であることを明らかにした。

第2章では、広島都市圏で高齢者を対象にしたアンケート調査を新たに実施し、高齢者交通の特性を分析した。これによって、高齢者の運転環境の整備と歩行者空間の整備が重要な課題であることを明らかにした。

第3章では、新住宅開発地の歩行空間の安全性の確保には、車道と歩道を分離することが基本原則として重要であり、既存市街地においては、歩車共存道路の一つであるコミュニティ道路の拡充もその有効な手段であることを明らかにした。

第4章では、短距離交通機関の一つである動く歩道を取り上げ、新規大規模開発地を対象に、その整備方法と課題について検討した。

第5章では、今後の道路づくりにおいて配慮すべき点を、高齢者の歩行者空間の確保と高齢者ドライバーのための運転環境の充実の二つの観点から整理した。

本報告書が今後「高齢者に配慮した都市交通計画の策定方法」の確立や、高齢者の交通事故削減の一助となれば幸いである。

最後に、本報告書をまとめるにあたって、広島大学大学院国際協力研究科大学院生石倉麻志君、工学部4年生松島智雄君に協力を得たこと記し、これらの諸君に感謝の意を表する

平成8年3月

代表研究者	杉恵頼寧	(広島大学 教授)
	藤原章正	(広島大学 助教授)
	大東延幸	(広島大学 助手)